

咸臨丸を函館から見る

北海道函館水産高等学校教諭 我妻雅夫

1 はじめに

生徒に「咸臨丸っていう船、知ってるかい？」と聞くと、「知らない?!」と答える生徒がほとんどである。幕末期に太平洋を横断した名誉艦「咸臨丸」を知らない。驚くべき時代になった。本稿では、函館水産高校が書籍、インターネット等で調べた、「咸臨丸が運んだ人・物・文化。そして歴史」について述べる。

2 オランダ生まれの咸臨丸、蝦夷地に眠る

咸臨丸は、1871年（明治4年）11月、旧暦9月に、宮城県白石市に城を構える仙台伊達藩片倉小十郎家臣とその家族401名を小樽に運ぶため、夕刻、函館を出帆した。この日は、月明かりが海面に照り返し、穏やかな海だったと乗船者の日誌に書かれている。

それがどういうわけか、咸臨丸は、函館出帆後、函館湾の西岸に位置する木古内町サラキ岬沖に座礁してしまう。地元では太平洋を渡った官船が座礁したとのことで、名主は羽織袴に着替え、提灯をかざして咸臨丸の救助に向かったという。幸い、咸臨丸の乗組員と乗船者、いずれにも死者はなく、全員無事救助された。この時の家臣とその家族401名は、後に、現在の札幌市白石区開拓の中心になる。

さて、オランダに生を享けた咸臨丸は、サラキ岬沖で破船し、その一生を終えたことになっている。現在、サラキ岬一帯は、地元有志を中心に結成された「咸臨丸とサラキ岬に夢見る会」によって公園が整備されている。公園に展示されている咸臨丸を模した帆船は青函連絡船に搭載されていた救命艇を改造したものである。公園には、オランダとの友好を記念して各種のチューリップが会員の手で植えられ、五月連休には「チューリップ祭り」が開催される。

この祭りでは、宮城県白石市の特産である「温麺（うーめん）」が販売されることがある。咸臨丸が座礁した時に、ご先祖様を救助していただいたご縁で、白石市にある温麺会社と「夢見る会」が協力し合って販売しているのである。

3 「咸臨丸」の姉妹艦「朝陽丸」函館七重浜沖に轟沈



図1 サラキ岬の浅瀬



図2 咸臨丸のモニュメント



図3 サラキ岬のチューリップ

戊辰戦争最後の戦いは1869年（明治2己巳年）に行われた箱館戦争である。この時に旧幕府艦隊と官軍の艦隊が箱館湾で戦ったのが「己巳（きし）海戦」である。官軍の軍艦の中に「朝陽（丸）」という艦が参戦している。この艦は、咸臨丸の姉妹船であり、オランダのキンデルダイクにある造船所で建造された。この海戦において、朝陽（丸）は旧幕府艦隊の「蟠龍（はんりょう）」が放った砲弾に弾薬庫を打ち抜かれ、一瞬にして轟沈。箱館七重浜にその一生を終えた。

現在、函館市の博物館には、朝陽（丸）の艦尾に掲げられていたと思われる「朝陽」の木製「陽」の字の残骸が展示されている。また、五稜郭公園の一面には、「朝陽（丸）」が搭載していたと思われるクルップ砲も展示してある。

この他に、己巳海戦を物語る史跡としては、函館護国神社境内に「海陸軍戦死人名」碑がある。

さらに、官軍の軍艦めがけて実際に大砲を撃った弁天台場の石垣は、入舟漁港の防波堤石垣として残っている。史跡ではないが、五稜郭公園に行く途中の函館市本町商店街の歩道には、咸臨丸をはじめ朝陽丸、蟠龍、開陽丸等の艦船のタイルが埋め込まれてあり、一見に値する。

尚、己巳海戦で旧幕府軍が官軍の艦船の函館港内での運動を制限するために海中に張った鉄索を切断した中心人物は、函館商船学校産みの親である「小林重吉」である。



図5 クルップ砲 (手前)



図4 陸海軍戦死人名碑



図6 咸臨丸のタイル



図7 入舟漁港防波堤の石垣



図8 (箱館)弁天台場

インターネットから引用

4 箱館戦争を描いた「麦叢録」の著者、小杉雅之進

箱館戦争を文と絵で記録したものに「麦叢録(ばくそうろく)」がある。函館中央図書館に原本が保管されていて、函館市民には割となじみのある本である。小杉雅之進とくれば麦叢録。麦叢録とくれば小杉雅之進。切っても切れない関係である。それ故に、よもや小杉雅之進が咸臨丸の士官だったことに気づく人は少ない。私もそのひとりで、元日本丸の船長だった橋本進先生の著書「咸臨丸還る」を読むまでは全く気づかなかった。「咸臨丸還る」は、現在、絶版になっているが、橋本船長が全国の公立図書館にこの本をご寄贈なされたお陰で、当地、函館中央図書館でも読むことができる。麦叢録の著者を咸臨丸の太平洋横断とからめて描いた「咸臨丸還る」は、「麦叢録」共々、函館にふさわしい本である。

麦叢録は、箱館戦争終結後、小杉雅之進が官軍に捕らえられ、青森の収容所幽閉中に書かれたものという。この収容所時代に、ひとりの仙台伊達藩士が小杉雅之進を訪ね、将来、小杉の子どもをこの藩士の養子に迎える約束がふたりの間で交わされたらしい。その藩士とは、戊辰戦争で官軍を悩ました伊達藩の「からず組」首領、細谷十太夫である。十太夫は戊辰の戦後も生きて、北海道開拓使(現在の北海道庁)の役人として北海道に赴任する折、小杉雅之進を青森を訪ねたらしい。

小杉雅之進は赦免後、新政府海軍から誘いがあったが、頑なに海事行政に携わり、現在の船員法等の海事法規の基礎を築いた。退官後は、請われて大阪商船に勤務した。

5 明治5年、明治天皇、「咸臨丸」の修理をご覧になる

咸臨丸は前述のとおり、明治4年、サラキ岬で座礁破船して、離礁作業の努力もむなしく、そ



図9 展示中のアンカーと生徒

ここで船の生命を終えたことになっている。ところが、日本機械学会が「機械遺産第1号」に指定した長崎の小菅修船場を明治天皇が1872年（明治5年）6月に行幸なさり、その折、咸臨丸の上架状況をご覧になったという記録がある。咸臨丸は本当に明治4年にサラキ岬の藻屑と消えたのだろうか。

現在、サラキ岬公園には、咸臨丸が沈んだと思われる海域から、1984年（昭和59年）に引き上げられた帆船時代のストックアンカーが展示されている。地元ではこのアンカーに使用されている鉄の年代測定を東京大学等に依頼したが、咸臨丸のものだという決定的な結果は得られていないとしている。

また、1990年（平成2年）に函館市立博物館の学芸員を中心に、大規模なサラキ岬沖の海底調査も行われているが、こちらも咸臨丸の物と断定できる決定的な証拠は見つかっていない。

水産高校にはスクーバ潜水の技術もあるので、地元と協力して、咸臨丸が積んでいたと思われるバラスト石の搜索活動を行えないかなとひとり考えている。同時に、己巳海戦で轟沈した咸臨丸の姉妹艦「朝陽丸」のバラスト石も搜索して、両者を比較できたらいいなとも思う。

6 「咸臨丸」座礁の原因は何？

座礁直前・直後の咸臨丸に関する日記、公文書を引用した書籍によれば、「船長は酒で赤い顔をしていた」「（函館出帆時の海峡は）月明かりが金波銀波を洋上に照らし云々」「咸臨丸座礁を報告する開拓使の公文書ページがその部分だけ新しい紙に差し替えられている」というような文章に出会う。

明治4年当時、日本人で海技士免許を持ち、定期航路の船長として雇われていた人は皆無で、全て欧米人の船長だったらしい。当時の日本人が赤ら顔の欧米人を間近に見たら、酒を飲んでいると思うにちがいない。また、「金波銀波云々」を書きとめた人は咸臨丸に乗船していた片倉小十郎家臣の家族であり、開拓使の報告書が破られ、「暴風吹き荒れる」と書いた書類に差し替えられたことを勘案すると、作家、合田一道氏が分析するように、「開拓使は欧米人船長に気を遣い、事故原因を意図的にすり替えた」というのが妥当と思う。

もし、本校が咸臨丸の事故原因究明に着手するとすれば、明治4年当時、函館で、英国商人トーマス・ブラキストンの手ほどきを受けて気象観測をしていた「福士卯之吉^{*}」の観測記録を探し出すこと、あるいは、札幌白石区に現在も居住する片倉家中のご子孫を当たり、咸臨丸座礁の模様の言い伝えを調べてみるのが考えられる。それにしても、直接の事故原因は判明しない可能性が大きい。

※福士卯之吉：1838年（天保9年）～1922年（大正11年）。箱館の船大工「続 豊治」の子。自身も船大工。後、英国商人が経営するポーター商会の店員。1864年、新島襄が米国船「ベルリン号」で箱館から脱国するのを手助けした。

明治になり、名を「成豊」と改め、開拓使技師として測量等に従事した。

7 ダウンバースト説

日魯造船を定年退職した函館在住の吉田好博氏は、ダウンバースト説を唱えている。氏は、咸臨丸が座礁した現場海域の航行経験が豊かで、ご自身も、11月にサラキ岬沖でダウンバーストに遭遇し、難儀した経験を持つという。

この説を後押しすると思われる事柄に、「明治4年、仙台湾の寒風沢を出帆する咸臨丸は、本来の三本マストではなく、二本マストであった」という説がある。トリムを考慮して設計・艤装されている帆船が、荷物を積むスペース確保のためにメインマストを撤去する。無謀すぎる。この状態で11月の北の海を走り、ダウンバーストに遭遇したとすれば、十分、座礁の可能性も考えられる。映画「白い嵐」は、ダウンバーストに遭遇した帆船の悲惨な状況をよく表現している。

8 仙台伊達藩片倉小十郎家臣団は、なぜ咸臨丸に乗ることになったのか

これには、大島商船高専が在る周防大島出身の官軍参謀が関係する。参謀の名前は「世良修蔵」。世羅は62万石の仙台藩主を顎でこき使い、会津攻めの先鋒とした。このような仙台藩主を藩主とも思わない世良を仙台藩士は苦々しく思った。そのような状況下、世良は上司である大山格之助に密書を書き、その密書が仙台藩士の手落ち、その密書には驚愕の4文字がしたためられてい

た。「奥羽皆敵」。

仙台・福島両藩士は世良を捕縛して、即刻、福島市内を流れる阿武隈川河畔に引っ立て、斬首の刑に処した。世羅の首は、何の因果か、回り回って白石城下に埋葬された。

世良の死を知った木戸孝允は「奥羽征討の理由ができた」と大層喜んだらしい。この後、東北・北海道・越後 36 藩の重役は白石城に集結して、官軍に対抗する奥羽越列藩同盟を結び、官軍と一戦交えることになる。その結果、同盟軍は官軍の軍門に下るのであるが、明治新政府による同盟軍（官軍は「賊軍」と表現）への処罰は峻烈を極めた。中でも白石の片倉小十郎への処罰は群を抜いていた。

南部藩、白石国替えの沙汰が下り、白石藩は、即刻、南部藩に城を明け渡さねばならない。行き場を失った白石藩士は蝦夷地開拓と防備を兼ねた開拓使貫属を新政府に願い出て、白石城を売却して旅費を工面し、寒風沢から咸臨丸に乗り組むことになったのである。



図 10 阿武隈川河畔(福島市)



図 11 世良修蔵の墓(白石市)



図 12 復元された白石城

9 船は人・物・文化を運び、そして歴史を作る

本校は、2008 年（平成 20 年）に、「咸臨丸とサラキ岬に夢見る会」会員の勉強会に呼ばれて、「咸臨丸最後の乗船者；仙台伊達藩片倉小十郎家臣団」の調査研究成果を発表した。この発表会がご縁となり、「夢見る会」の会員は、宮城県白石市を初めて訪問することになる。白石市は市長はじめ、観光協会共に大歓迎だったと新聞発表された。

その後、「夢見る会」とは直接の関わりがないまま、今日に至っている。この間、本校は横浜港大さん橋ふ頭に展示されている「北光丸」のイベントを通して、全船協のお取り計らいにより、橋本進船長と面識を得ることができた。大変失礼な話しではあるが、できれば橋本船長に木古内町や函館市にお越しいただき、「咸臨丸と小杉雅之進」に関するお話をいただけたらなど、ひとり夢見ている。

以上、咸臨丸が運んだ人と歴史について駄文をしたためた。咸臨丸がらみの未知の歴史を掘り起こし、さらに新しい歴史を作っていく。咸臨丸に限らず、船は人・物・文化を運び、そして歴史を作る。それは今も昔も将来も変わることはない。

最後になりましたが、機関誌「全船協」の貴重な誌面を頂戴し、投稿の機会をいただいたことに心から感謝申し上げます、擱筆します。



図 13 木古内町で発表する生徒



図 14 咸臨丸サミット(2011年)



図 15 北光丸と橋本船長